

優しい兄貴

谷 村 裕

初めてお目にかかったときの大平さんは、随分大先輩のように見えた。昭和十八年、大平さんが主計局におられたことである。大蔵省では二年しか違わない先輩だったけれども、年齢は相当大きく違っていたからである。育英制度創設のことで、文部省の劔木さんと一緒に、よく私どものいた総務局の野田総務課長のところにこられたことを思い出す。

戦争も末期の昭和二十年二月に、津島さんが大蔵大臣になられたとき、大平さんは秘書官事務取扱になられたが、どういうわけか前任の石渡大蔵大臣の秘書官事務取扱をしていた私も、しばらくそのまま津島大臣にお仕えすることになった。

一週間ほど、黒金、大平両先輩秘書官の驥尾に附して、朝は滅法早く、夜は真夜中までという津島大臣の抱持ちをさせていただいたが、灯火管制下の大臣のお宅で、夜遅くまで大臣の悲憤慷慨の言葉を神妙に承っておられた大平さんの姿が、今でも目に浮かんでくる。

大臣が外出して、たまに秘書官だけで日当りのよい大臣官邸の秘書官室で留守番をしているときなどは、大平さんも少しばかり息抜きができるときだったのだろう、私にいろいろ面白い話を聞かせて下さった。学生のころのことや蒙疆時代のことなど、たくまざるユーモアを交えてのお話だったが、大平さんの優しい目つきと、かわいらしい口もとを知ったのは、そのときのことである。

大平さんの秘書官稼業はこのときが始まりで、その後また津島さんが二度目の大蔵大臣のとき秘書官をつとめ、池田さんのときは三度目の秘書官つとめになる。一見茫洋とした風貌ながら、緻密に思いめぐらし、こまめに動き回る大平さんの姿がそこに見られるように思う。

昭和二十三年、私が結核に倒れ、肋骨七本を切りとって肺を潰すという大手術を受け、長期療養に入ったころ、大平さんからいただいたお見舞いの手紙は、私にとっては終生忘れられない励まし言葉だった。

後年、このことを大平さんに申し上げたら、例の照れたときの顔つきで、「イヤ、ナニ、ソナ……」などといつておられたが、二年や三年道草を食っても、それは長い人生にとっては決してマイナスではない、もちろん本人の心掛けにもよるけれど、自分の場合はかくかくというようない一文だった。どこに大事に蔵いこんだのか、いま見当らないのが残念だが、言葉を一つ一つ選び、文章をきちんと整えた、いかにも大平さんらしいお手紙だった。

その後の大平さんは、政治の途を選び、ついには総理の印綬まで帯びられることになったけれども、そういう公人としての大平さんのなかに、大蔵省での優しい兄貴分としての大平さんの面影を、私は忘れることができない。

(東京証券取引所理事長)